

愛空也

季は	地は	後	前
シテ	ワキ	シテ	ワキ
雜	山城	龍王	空也上人
		前に同じ	老翁

「心の月の行末や。く。西の山路に急がん。

詞 「是は念佛の行者空也と申す者にて候。我いまだ愛

宕山に参らず候ふ程に。唯今思ひ立ちて候。

サシ 「昨日も徒に暮らさず。口に名号を称へ。今宵も空

しく明かさず。心に極樂を願ふ。無常の虎の声近
づくにも。臨終の夕べの唯今ならん事を歎ぶ。雪
山の鳥の囀りを思ふにも。来迎の朝を待つ。一度
も南無阿弥陀仏と称ふれば。

地 「蓮の上に上るなる。く。露の此身を誘ふべき。

峰の嵐や谷川の。水の流れも鳴滝の。川路に就き
て尋ね行く。雲も上るや月の輪を過ぎて愛宕に着
きにけり。く。

「急ぎ候ふ程に。是は早愛宕の御山に着きて候。ま
づく地蔵権現へ参らばやと思ひ候。實にや都に
て承り及びたるよりも貴き靈地にて御座候ふ物か
な。南無や地蔵大菩薩六道能化にてましませば。

迷ひの衆生を導き給へ。又是なる法華八軸は。帝より賜はりたる御経なれば。先づ仏前にて読誦申さばやと思ひ候。昔在靈山名法華。今在西方名阿弥陀。

地「衆生濟度の觀世音。く。頼め唯三つの世も。唯一仏ぞ一乗の。法も妙なる一念。阿弥陀仏と称へ給へや。く。

シテ「谷静にしては纔に聞く山鳥の語。橋危うしては斜

に踏む峠猿の声。聞くも悲しき老の身の。足弱車法に引かれて。火宅を出づべきうれしさよ。

地クリ「それ始めの御法さまぐなれども。為法便力四十年。未顯真実と説き給ふ。

シテサシ「然れば余経の瓦礫を捨てゝ。

地「妙法一味の玉を拾はんが為めに。ろくするげきを顯はし。信心不動の禪定に入り給ひ。一切衆生の迷はざる以前。本来の面目妙法金剛不壞の正体に。

導き入れんと呪秘し給ふ。

クセ

「されば此經を説き給ふに。天より四華降り。大地六種も震動し。地神龍神も顯はれ。靈山の会座に連なりしに。眉間白毫を放ち給ひ。天地十方を照らしつゝ。光にあたる物皆悉く成仏す。」

シテ

「斯かる大乗功徳の。」

地「妙なる法を聞く時は。靈山会場もこゝなれや。此

山松の夕嵐。不求足菩薩住寂靜。清淨心を起せと

の。教へはさまぐの。御法ぞあらたなりける。シテ詞

「いかに上人に申すべき事の候。徒に朽ち果てぬべき老木の桜の。今上人の御法の雨に。湿ひを得て花咲く春に。逢はん事の嬉しさよさりながら。一つの望みを叶へ給へ。」

「不思議やな是なる老人忽然と來り。法華を聴聞する氣色。唯人ならず見る所に。そもそも望みとは何事ぞ。」

ワキ詞

シテ「さん候ふ上人の感得し給ふ。仏舎利を我にたび給へ。

ワキ「易き間の事なれども。空也は舎利を感得せず。まづく御身は如何なる人ぞ。

シテ「今は何をか包むべき。我は此山に住む龍神なるが。仏舎利を持すれば三熱をまぬかる。包み給ふか上人の。唯今読誦し給ひし。御経の軸の中に仏舎利あり。即ち是をたび給へ。

ワキ「不思議の事を申す者かな。此御経はかたじけなくも。延喜の帝より賜はりたる八軸なれば。仏舎利ありとも知らざりしと。即ち経を開きつつ。軸を放ちてよく見れば。

地「不思議や軸の其中に。く。水晶の箱に入れ。青色の仏舎利。赫灼として見え給へば。即ち取り出だし。老翁に与へたび給ふ。見る人奇異の思ひをなして。上人の御奇特。まのあたりなるあらたさ

よ。

シテ詞

「實に有難き御事かな。此仏舍利を保つならば。熱氣熱風金翅鳥の。三つの苦しみをまぬかるべし。此報恩に何事なりとも。望みを叶へ申すべし。

ワキ詞
「空也が身には望みなしさりながら。此山上に水なくして。遙かの谷より汲み運ぶ。御身は龍神にてましまさば。水は心にまかすらん。此山上に清水を出だし。絶えぬ流れとなし給へ。

シテ
「是れ又易き御事なり。三日が間に老翁が。まことの姿を顕はして。山上に水を出だすべし。

地
「いとま申して帰るとて。く。御前を立つて山深み。行くかと見れば姿は。夢の如くに失せにけり。

く。

(申入)

ワキ
「さても有りつる翁の言葉。まことしからず思へども。其約諾を今日の空。氣色かはりて雲霧の。く。立ち添ふ影も鳴神の。声も落ち来る雨の足。

乱るゝ空の氣色かな。く。

「谷風はげしき雲の波。谷風はげしき雲の波に。浮び出でたる龍神の勢。はるかの谷より上ると見えしが。上人に向ひ。渴仰するこそ有難けれ。

後ジテ
「角を傾け上人を礼し。

「角を傾け上人を礼し。龍王峰に上ると見えしが。

枯木を倒し岩根を碎き。大石を引き割りえいやと投ぐれば。岩漏る清水玉散りて。さゞ波立つてぞ

流れける。

ワキ
「空也は奇異の思ひをなし。

地
「空也は奇異の思ひをなして。巖に上りて水を結び。天地に供じ。十方の諸仏に手向くる瀉水。善哉々々と。喜び空也は帰り給へば。龍王忽ち雲を起し。愛宕の峰の梢に翔れば。谷には流るゝ白浪の。浮べば沈み上れば下る。龍王の姿も次第に遠く。く。遙かの谷にぞ帰りける。

底本 .. 国立国会図書館デジタルコレクション 『譜曲評釈 第六輯』 大和田建樹 著